

〈書評論文〉

四大陸の親密性

—— 自由主義と植民地主義の共犯関係 ——

Lisa Lowe,
The Intimacies of Four Continents
 (Duke University Press, 2015)

山 下 嗣 太

1 はじめに

あらゆる知識の生産はその当時・当地の社会状況に埋め込まれており、その社会の内外における権力関係の上に成り立っている。本書は、知識生産に不可避免的に介在するこのような権力性を論じるものである。例えば自由、平等、発展、理性などは社会科学や人文学において頻繁に用いられる基礎的な概念であるが、本書によれば、これらは自由主義という特定の歴史的・地理的状況の産物である。私たちはこれらを普遍的概念のように理解しがちであるが、それは成立背景にあった権力関係の忘却につながるという。本書が主な議論の対象とするのは、自由主義の根底が形成された18世紀から19世紀の大英帝国による植民地支配である。当時、西洋大国では急速な近代化が進んでいたが、その運営は植民地支配に大きく依存していた。すなわち、自由主義もまた植民地主義の産物だったのである。しかし、近代化を進歩、発展、自由の拡大などと捉える自由主義のナラティブは、その成立条件であった植民地主義的搾取を隠蔽する。そこで著者のリサ・ロウは、自由主義の成立と、植民地主義や資本主義の拡大との関係に焦点を当てる。

歴史認識に内在する西洋中心主義的なイデオロギーに対する批判は、ポストコロニアル理論において論じられてきた。その従来のアプローチは、非西洋の政治的主体性の回復による、近代化のナラティブの相対化である。しかし、非西洋社会を西洋社会のオルタナ

タイプとして提示することは、依然として西洋社会をモデル化することに基づいていると批判されている (Bhambra 2010)。そこでグローバルな接続を、西洋的近代化の結果ではなく前提条件として捉えるという転換が、歴史学や歴史社会学、国際関係論などにおいて分野横断的に議論されており、本書もこのようなアプローチを共有している (Hunt 2014、Subrahmanyam 1997)。これは各地域を独立的に捉えて比較するのではなく、世界の接続性を前景化することで、西洋を中心とした序列構造から抜け出そうとするものである。

タイトルにある四大陸とは、ヨーロッパ、アフリカ、アジア、アメリカ、すなわち南極をのぞく地球上のすべての大陸を意味する。私たちの想像力は依然として方法論的ナショナリズムによって制限されがちであるが、大英帝国がその支配圏を西インド、東インドなどへと分断したように、地理的分断は植民地主義的、そして自由主義的思想に内在していた。その結果、私たちは大陸間が「地理的にも、概念的にも」遠く離れていると考える傾向にある (18)。しかし実際には、大英帝国の覇権は四大陸に散らばる植民地や貿易業者の地理的結びつき自体をその原動力としていた。ロウは、このような関係性の隠蔽そのものが自由主義というプロジェクトの一部であったことを指摘し、「親密性 (intimacy)」をキーワードとして四大陸を再接続する。

親密性という語から一般的に想起されるのは、個人間の閉鎖的な関係である。植民地主義下におけるそのような親密性、すなわち性愛関係や家族の編成、混血化の過程を通じたアイデンティティ形成などは、ポストコロニアル理論を踏襲するジェンダー研究が論じてきた。しかしロウは親密性をこのような狭義に限らず、「内面性や個人の意思、資産所有や家庭生活といった、自由主義的な人間性の領域」と捉え、これへのアクセスが植民者側に限定されていると指摘する (18)。そしてこの親密性は、「『四大陸の親密性』、すなわち様々な労働者たちの循環、接続、連携、混交によって成り立つフィクション」であるという (21)。このようにロウは、自由主義的个人における親密性を唯一普遍の定義とするのではなく、その成立要件であった被植民者間における親密性と併置することで、複数形としての「intimacies」を論じる。

「四大陸の親密性」を不可視化してきた自由主義は、今日の私たちの知識形態を規定している。そのため、これを改めて論じるには方法論が最大の課題となる。ロウは、大陸間を分断的に想像することは、アーカイブの編成方式に反映されているという。植民地のアーカイブは宗主国によって編成されたが、地域ごとに分割され、それらを結びつける想像力を阻む。そこで、「わけ隔てられたリポジトリを横断しながら読む」ことが必要である (5)。比較文学者であるロウはさらに、このような分断が地域間のみでなく、行政文書、論文、文学といったテキストの形式間にもみられることを指摘する。これらの各形式は社会を独

自の方法で表象するが、私たちはそれぞれを異なる目的のために別々に読む。そこでロウは、異なる地域に関する、また異なる形式のテキストを合わせて読むことで、それらの著者が意図したナラティブから離れた読み方を試みる。本書は大英帝国の植民地主義という大きなテーマのもとで、各章において史料と、自伝（第2章）や小説（第3章）、自由主義哲学（第4章）や反植民地主義思想（第5章）といった様々なテキストを組み合わせる。それによって、自由主義がいかにしてその成立条件である植民地主義、そして「四大陸の親密性」を隠蔽してきたかを浮き上がらせる。以下、章ごとの内容を検討する。

2 奴隷制からの「解放」と「自由」主体の成立（第1章）

18世紀の終わりから19世紀にかけて、大英帝国の経済政策は、重商主義に基づく領地支配や奴隷制から市場経済を前提とした国際交易へと移行した。その転機は自由貿易の成立であったが、それは「自由」概念そのものの確立を必要とした。そして、奴隷解放派が自由貿易の推進者であったことからわかるように、その契機は奴隷の解放に求められた。第1章でロウはまず、1803年に大英帝国の植民地省から東インド会社へ送られた覚書に注目する。奴隷の取引は1807年に禁止されたが、奴隷制撤廃を論じるこの文書において、アフリカ人奴隷を代替する労働力として中国人が言及される。中国人クーリーには非自発的に連行された者もあり、また実際には多くの権利が制限されていた。それにもかかわらず、中国人クーリーを奴隷と反意的である「自由」な人種や労働力として表象することは、実態として存続していた人種的搾取を隠蔽した。ロウは、忘却されてきた中国人クーリーの存在を史料に見出す一方で、「中国人」を統一的な歴史的主体として前景化することは、多様な主体間の関係性を不可視化すると注意喚起する。そこで本書は、特定の歴史的主体性の回復ではなく、そのような排除を生む、自由主義的な知識形態の問題化を目的とするのである。

中国人の導入による大陸間の親密性の創出は、狭義の親密性のコントロールを伴った。植民地政府は非白人間の連帯を危険視し、分断を試みた。例えば中国人女性を移住させて中国人同士での家族形成を促し、中国人を労働力としてだけでなく、イギリス人とアフリカ人の間の人種的障壁として利用した。このように、自由主義的主体としてのヨーロッパ人とそれ以外を区別する人種概念の確立は、一見これと矛盾する、自由や解放を称賛する自由主義の成立条件であった。人種的差異に基づく搾取を背景として生まれた自由、平等、理性、進歩、人権といった概念を、私たちは現代の社会問題を考察する上で当然のように用いている。ロウは、これらが無批判に用いることは、その根源にある暴力性の忘却と再

生産につながるという。

3 文学と歴史的想像力（第2章、第3章）

奴隷廃止派は、イギリス国内の人々に対して、植民地における奴隷の窮状を訴える必要があった。そのような想像力の媒介として利用されたのが文学であり、一例として、元奴隷であるオラウダ・イクイアーノによって1789年に出版された自伝が言及された。自伝というジャンルは、自由主義的な個人という近代的主体の確立を前提とする。ロウは第2章において、この作品に内在する矛盾を検討し、権利や自由といった語りに隠された服従の歴史を読み取る。西アフリカのベナン王国出身で幼少期に奴隷となったイクイアーノは、蓄財によって自らの自由を買い取り、過去に自分が商品であった大西洋貿易に商人として参入した。ロウによれば、イクイアーノによる自由貿易の礼賛は、現在進行形の植民地主義的搾取の忘却を促す。奴隷制からの解放を「自由」の達成という単線的・進歩的な時間の経過として、また個人の物語として描く自伝の形式は、奴隷制を過去のものとして表象し、有色人種という集合的な主体に対して、依然存続する搾取を不可視化する。

また、イクイアーノは奴隷の窮状を描写する上で、イギリス人の奴隷廃止論者によって書かれた詩を引用する。イクイアーノは自由主義的主体を体現しているかのようでありながらも、依然としてヨーロッパ人によって代弁される客体だったのである。加えてイクイアーノには、「自由」になってからも、アフリカ人であるが故に再び捉えられて奴隷になるリスクが常に付きまとい、その主体性は依然として人種的差異によって制限されていた。ロウはイクイアーノに、アフリカ人奴隷と自由貿易の商人という、相反する主体性のあいだのゆらぎを見る。自伝という形式において観察できるこのような矛盾のうちに、隠蔽された歴史を読み取る可能性を見出すのである。

自由貿易は貿易圏の拡大を促し、大陸間のさらなる親密性を生んだ。これはイギリス社会への植民地産品の流入につながり、狭義の親密性の空間である、ブルジョワ家庭のライフスタイルに変化をもたらした。マルクスがこの状況を抽象的な価値の概念によって理論化したのに対し、同時代の小説家であるサッカレーは、ブルジョワ階級の驕奢な家庭生活を詳細に描いた。1849年に出版された代表作である『虚栄の市』は、ヴィクトリア文化におけるブルジョワ階級の俗物性と腐敗を風刺する。しかしロウは第3章において、この作品を単に市場社会や階級分化の反映としてではなく、そこに介在する商品の「生産の歴史と地理」に位置づけながら読むことで、小説に反映された「時代の無意識」考察する（82）。

例えば家庭内を彩る綿織物、更紗やキャラコは元来インドから輸入されていたが、イギ

リスがそれを模倣し、機械化によって国内で安価に大量生産した。それらの綿製品は逆にインドへ輸出され、インドの綿織物産業を破壊した。小説中では絹のストッキングも言及されるが、絹産業もまた、イギリスが中国から、アヘンを蔓延させると同時に模倣したものである。イギリスの経済成長や産業革命を発展や近代化として描く単線的なナラティブは、その背後にあった植民地主義的搾取を不可視化する。しかしそれは、家庭生活という日常的場面の節々に垣間見えるのである。抑圧や搾取の歴史に関して、歴史研究は史料による事実の探求を行う。一方で文学は、「どのようなありえたか」という仮定法過去に基づいて、これまで排除されてきた歴史的可能性の想像を可能にする（40）。

4 知識生産と植民地主義（第4章、第5章）

自由貿易においては、海上での勢力拡大や港へのアクセスが重要となった。アヘン戦争後の香港割譲は、この新たな貿易覇権のためである。中国に輸出するアヘンは、東インド会社が植民地支配したインドで生産されたが、自由主義思想の基礎を形作ったジョン・スチュアート・ミルは東インド会社に勤務し、インドとの通信の審査を行っていた。ミルは「自由」が単線的な進歩であるという念頭のもと、「自由」の要件を満たしていない「後進」の人々に対しては、独裁的な植民地支配を正当化した。ロウは第4章において、「自由」の概念に内在したこのような人種的差異が、香港の統治様式を規定したと指摘する。その上で、ミルによる自由主義哲学と、その帰結としての香港支配に関する史料を合わせて読むことで、自由主義のナラティブがいかに植民地主義を隠蔽したかを考察する。

香港において、植民地政府は戒厳令による土地の強制接収を行い、また反乱を「違法化」することで武力鎮圧した。これは中国人全体を「犯罪」と結びつける言説に基づいており、のちには非ヨーロッパ人のみが人口登録を義務化され、中国人の出港も記録管理されるようになった。また、中国人女性はイギリス人の性的規範から逸脱しており、性病の媒介者であるとされ、ヨーロッパ人の相手をする中国人娼婦には検査が義務付けられた。こうして貿易覇権のために、中国人を「人口」として管理する生権力に基づいた統治が確立された。私たちは自由主義から、国家主権の尊重や平等性を連想するが、植民地における独裁制は「自由」と矛盾せず、むしろイギリス本国における「自由」を成立させる要件そのものであった。

以上のように、私たちの議論を規定する自由主義思想や単線的な歴史認識は、植民地主義を通して形成された。言い換えれば、植民地主義の歴史を批判的に検討するための知識枠組そのものが、植民地主義に由来している。これが植民地主義を考察する上での困難で

ある。ロウは最後の第5章で、このような西洋中心的な歴史認識の基礎を形成したヘーゲルやマルクスに対する、反植民地主義の思想家であるC・L・R・ジェームズとW・E・B・デュボイスによる批判を検討する。マルクスは階級対立をヨーロッパ社会内部のものとして描き、資本主義確立のために搾取されたアフリカ人奴隷はそこから捨象された。そこでジェームズは階級対立構造を、植民地主義を内包するグローバルなものとして捉えなおした。そして、ハイチの奴隷によるフランスからの独立革命もまた階級闘争であるという。搾取の客体とされていた奴隷の政治的主体性を論じることで、革命というナラティブの中に有色人種を位置づけたのである。これによりジェームズは、グローバルな植民地主義・資本主義の覇権に対抗するための、有色人種の労働者による国境を超えた連帯を想像可能にした。

一方デュボイスは、アメリカ合衆国における南北戦争後のリコンストラクションの失敗によって、異人種労働者間の連帯が実現しなかったことを論じる。デュボイスもまた、階級の議論に人種的差異の視点を導入した。有色人種に対する搾取をアメリカ社会内部のみの問題とするのではなく、それによって達成されたアメリカ資本主義の国際的覇権が、さらなるグローバルな搾取をもたらしたと指摘する。これを通してデュボイスは、アフリカ系アメリカ人を国際的な反人種主義運動の内部に位置づけた。二人は階級闘争のナラティブに人種の観点を持ち込むことで、階級闘争と、反人種主義・反植民地主義運動との連帯可能性を論じた。このように「四大陸の親密性」は、植民地主義の産物であったと同時に、今後あり得るかもしれない連帯の可能性を示唆するものである。

5 考察

本書は一見無関係であるようなテキストや事象を結びつけるという方法をとるため、多くの事例を含み、それぞれの歴史的事実が詳細に検討されているわけではない。一方で、各分野に固有な研究方法の確立に伴い、特定の事例に関する詳細な議論が優先され、研究対象の時間的・空間的な範囲が狭まってきた(Shryock & Smail 2011)。研究における、このような既存の規範自体が特定の歴史的条件に基づいたイデオロギーを有するものであり、それを積極的に再考することを本書は求めるのである。ロウは比較文学者であり、様々な事例を組み合わせる議論を組み立てる妙が本書の特徴である。

ロウは自由主義的な知識の形成が植民地主義に依存していたことを論じるが、そのような知識は西洋社会の内部に留まったのではなく、植民地社会へと流入し、反植民地主義運動に結びついたことを指摘しておくべきだろう。西洋的教育を受けた現地人エリートは多くの植民地において、近代化運動や独立運動の中心となった(Milner 1995)。このように、

植民地主義的搾取に基づいて形成された知識は、現地人による独立運動のきっかけとなった。インドネシアの作家ブラムディア・アナンタ・トゥールによる『ガラスの家』は、オランダ領東インドを舞台として、そのような知識人の運動に対する弾圧を描く。弾圧する側も同じく西洋式の教育を受けた役人であり、現地知識人たちの活動が違法ではないと知りながらも、植民地主義の強権によってこれを処罰することが、自らのヨーロッパ的ヒューマニズムと矛盾し、良心の呵責を招いた (Toer 1988 = 2007)。ロウはいかに自由主義と植民地主義が矛盾しなかったかを論じたが、本書に従って過去の可能性に想像を膨らませるなら、歴史を生きた当人たちにはこのような葛藤もあったのかもしれない。アシシュ・ナンディによれば、植民地主義は植民者側に対しても文化的・精神的変容を迫るものであった (Nandy 1983)。植民者を抑圧者として切り捨てるのではなく、その内的変化もまた植民地主義の結果として論じる必要がある。

「四大陸の親密性」というタイトルは、ヨーロッパは中心ではなく、すべての場所の間には何らかの関係性が存在するというメッセージとして読むことができる。一方、本書は大英帝国とその植民地や交易圏を主に論じ、あくまでも大英帝国を中心とした歴史記述を行う。非西洋間の接触が論じられているが、それらを結びつける主体としての英国が想定されており、サンジャイ・スブラフマニヤムが「接続された歴史」として論じるような、非西洋社会間において恒常的に続いてきた関係性は十分に注目されていない。加えて、大陸という地理的区分は、人種のイメージなどと相まって想像される政治的な構築物である (Lewis & Wigen 1997)。例えば本書でも言及された香港に対して、中国本土を大陸と呼称することは現在まで一般的である。このように、大陸という語自体が多くの政治的ニュアンスを含むものであり、本書が分析概念やカテゴリーに内在する権力性を批判している以上、入念な検討が必要である。

「四大陸」と名付けられている理由は、もう一つの大陸である南極においては人間活動が行われていないことを想定しているからかもしれない。しかし O'Reilly (2016) は南極を人類学的に研究している。この論文は「親密性」の概念を、密接な関係を通して対象を熟知するという意味で用い、南極における研究者とその研究対象である氷との親密性を論じている。南極探検の歴史を論じる Griffith (2007) もまた、南極における人間の経験を描くことで、人が居住しない南極を「人類史」の一部として想像することを可能にする (Chakrabarty 2012)。本書でも述べられているように、植民地主義は人のみでなく、商品などの物質を通じた支配でもあり、その生産は気候、生態、地形といった自然条件によって強く規定されている。歴史記述における人間中心主義もまた、本書が論じているような西洋近代主義の産物であり、共通の問題系の一部として検討される必要があるだろう

(LeCain 2017)。ロウが提示する、これまで分断されてきた要素を結びつけるという方法は、このように本書の内容を超えた議論をする上でも適用できる。私たちの歴史的想像力に対するこのような刺激が、本書の最大の魅力である。

参考文献

- Bhambra, G.K., 2010, "Historical Sociology, International Relations and Connected Histories", *Cambridge Review of International Affairs*, 23 (1): 127-43.
- Chakrabarty, D., 2012, "Postcolonial Studies and the Challenge of Climate Change", *New Literary History*, 43 (1): 1-18.
- Griffiths, T., 2007, *Slicing the Silence: Voyaging to Antarctica*, Cambridge: Harvard University Press.
- Hunt, L., 2014, *Writing History in the Global Era*, New York: Norton.
- LeCain, T.J., 2017, *The Matter of History: How Things Create the Past*, New York: Cambridge University Press.
- Lewis, M.W. & K.E. Wigen, 1997, *The Myth of Continents: A Critique of Metageography*, Berkeley: University of California Press.
- Milner, A., 1995, *The Invention of Politics in Colonial Malaya*, New York: Cambridge University Press.
- Nandy, A., 1983, *The Intimate Enemy: Loss and Recovery of Self Under Colonialism*, Delhi: Oxford University Press.
- O'Reilly, J., 2016, "Sensing the Ice: Field Science, Models and Expert Intimacy with Knowledge", *Journal of Royal Anthropological Institute*, 22 (S1): 27-45.
- Shryock, A. & D.L. Smail, 2011, "Introduction" in Shryock, A. & D.L. Smail eds., *Deep History: The Architecture of Past and Present*, Berkeley: University of California Press, 3-20.
- Subrahmanyam, S., 1997, "Connected Histories: Notes towards a Reconfiguration of Early Modern Eurasia", *Modern Asian Studies*, 31 (3): 735-62.
- Toer, P.A., 1988, *Rumah Kaca*, Jakarta: Hasta Mitra. (= 2007, 押川典昭訳『ガラスの家』めこん.)

(やました つぐた・博士後期課程)